



新庁舎の竣工にあたって

待望の奈良文化財研究所新庁舎が完成し、無事落成の運びとなりました。これもひとえに皆様の日ごろのご支援の賜物と深く感謝申し上げます。

この新庁舎は、奈文研の3代目の庁舎で、奈文研が自ら設計した初めての建物になります。1952年の奈文研創設時の初代庁舎は、奈良公園内にある旧奈良県商工館（現在の奈良国立博物館仏教美術資料研究センター）で、平城京研究の先覚者であり建築史研究の大家であった関野貞博士が設計し、1902年に完成した由緒ある近代和風建築でした。

2代目の庁舎は、1980年、平城宮跡に西接する旧奈良県立奈良病院を改修した建物で、当時平城宮跡内に分散していた埋蔵文化財センターと平城宮跡発掘調査部を統合する形で移転しました。しかし、築後半世紀を経て建物の老朽化が進み、耐震性と狭隘化が問題となり、今回の新庁舎建設の運びとなりました。

新庁舎の建設予定地は、2度にわたる試掘調査の結果、旧秋篠川の氾濫によって遺構面は失われていると判断していましたが、旧庁舎解体後の発掘調査で、平城京の条坊道路遺構や、秋篠川の旧流路の埋立遺構が遺存することがあきらかになりました。

発見した遺構の取扱をめぐる、文化庁をはじめとする関係機関と協議を重ねた結果、新庁舎の建物位置や平面プラン、床面積、地下構造等を大幅に変更して遺構保存をはかることにしました。このため、新庁舎の完成は当初計画から2年遅れとなり、延床面積も計画変更前よりも縮小しましたが、遺構と共存する奈文研らしい新庁舎になりました。

完成した新庁舎は、本館とエントランス棟からなる地上4階、地下2階、延べ床面積11,387㎡、高さ14.99mの建物です。建物の外観は、特別史跡平城宮跡からの眺望に配慮し、素地を生かした落ち着

いた色調に統一しています。日射抑制を兼ねた深い軒や、裳階を模した二重庇によって構成される水平ラインの重なりが、意匠上の特徴です。

一条南大路の路面上に建つエントランス棟は、遺構保存に配慮して旧庁舎の基礎杭と同位置に杭を打設したため、小規模な2階建ての建物となりました。この一階をエントランスとし、2階には大会議室を設けました。

いっぽう、庁舎の中心となる本館は、1階に研究支援推進部と図書室、2階に都城発掘調査部、3階に文化遺産部と埋蔵文化財センター、4階に企画調整部の各研究室を配置しました。2階と3階の中央部には特別収蔵庫を設け、地下には47万冊の書籍の収容が可能な書庫と、高エネルギーX線CT装置を設置しています。

地下に保存した遺構は、地表に遺構表示をおこない、エントランス棟1階のエントランスホールには発掘調査の成果や出土品を紹介する展示スペースを設けました。

この新庁舎完成を一つの節目として、奈文研の所員一同、心新たに文化財の調査研究業務に邁進する所存です。新庁舎の建設にあたり、地下遺構の保存と工期の延長、予算面等で、文化庁と独立行政法人国立文化財機構から多大なご支援を賜りました。また、新庁舎建設に携わった工事関係者や関係機関、近隣住民の皆様に、心からお礼を申し上げます。

（所長 松村 恵司/研究支援推進部 立川 弥生子）



完成した新庁舎（南東から）